

学校の Measure

中邑 賢龍

「個別最適な学び」が昨今の教育のキーワードとなっている。従来もその視点がなかったわけではなく、子どもを取りこぼさないように、先生たちはクラスの中で様々な工夫を行ってきたはずである。また、それでも適応できなかつた子どものために、特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室、適応指導教室、あるいは能力別クラスが設置されてきた。

しかし、これまでのように、子どもを心理検査や学力検査で診断し類型化して実施してきた個別最適な学びには限界がある。なぜならば、類型化されて1つの集団に入れられた子ども一様ではないからである。診断する子ども個人の知的機能や身体機能の評価軸以上に、居住地域、家族構成、家庭の経済状況など様々な要因が子どもの成長の背景に存在する。類型化することで子どもはこれまでよりは適した環境で学ことができるかもしれないが、最適な環境にはまだ遠い。

それでも「個別最適な学び」が今になって取り上げられるのは、ICTが持つ時間・空間を超えた学びの実現可能性に多くの人が期待しているからである。ギガスクール構想が発表された記者会見の中で、当時の萩生田文部科学大臣は「この新たな教育の技術革新は、多様な子供たちを誰一人取り残すことのない公正に個別最適化された学びや創造性を育む学びにも寄与するものであり、特別な支援が必要な子供たちの可能性も大きく広げるものです」と述べている

(https://www.mext.go.jp/content/20191225-mxt_syoto01_000003278_03.pdf)。

だからと言ってICTの導入がすぐに個別最適な学びを実現するわけではない。一律である学習内容の選択の自由の拡大、個々の学習ペースの変更、学習の拠点となる場所の保障、履修の管理、教員の確保、進学や就職との接続など様々な課題がある。しかし、AIやDX（デジタルトランスフォーメーション）の進化の先には間違いなく個別最適化がある。その時に、個別最適な学びを実現する子どもの学びの提案までもAIに任せていいのだろうか。私は、その判断を教師が行うことに教師の存在価値があると考えている。個別最適な学びを提供する未来の学校の教師であるためには、我々一人一人が今の学校とは全く異なる学校を想像し、それに備えていく必要がある。未来の学校の形態が今のように各地域に建っている学校の校舎の中だけで行われているとは思えない。メタバース上でも学べる環境も整備されていこう。ロボットも教師として働いているかもしれない。

その時に人間の教師に求められるのはなんだろうか？マニュアル化した診断評価技術や教授法ではなく、子どもを惹きつける人間力とコミュニケーションしながら子どもの内面を読み取る力なのかもしれない。